2021年6月27日　仙川キリスト教会礼拝にて

献身の証　　　　　　内海研治

マルコ10:45「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

今日は、私が働いているCFFと献身というテーマで証をしたいと思います。

先月、CFFの創設者である二子石さんと現代表理事の安部さんとのオンライン対談がありました。安部さんはマレーシアから参加し、二子石さんは埼玉のご自身の所属教会から中継を繋ぎました。25年前にCFFをつくった二子石さんは御歳84歳。二子石さんは今回みなさんに直接お話しできるのは最期かもしれないと、約1時間に渡って思いの丈をお話してくださいました。

二子石さんはご自身のことをCFFの創設者とは思っておらず、神様がやりなさいと言った仕事で、神様の命令に従ったつもりでいる、とおっしゃっていました。CFFは御言葉の実現のためにある、と直接伺ったこともあります。

私と二子石さんとの出会いはCFFマレーシアでした。当時大学4年生だった私は、キャンプディレクタートレーニングに声をかけていただき、約1週間マレーシアで研修を受けました。そのときにCFFスタッフを指導してくださったのが二子石さんです。モーセからCFFのディレクターシップを学ぶなど、聖書を基盤に研修が進んでいきました。

CFFマレーシアの児童養護施設子どもの家では、安部さんは子どもたちから「お父さん」と呼ばれていますが、二子石さんは何と呼ばれているかと言うと「ビックお父さん」と呼ばれ、子どもたちからも慕われていました。

私は初めて二子石さんと話す前、どんな人だろうと想像し、創設者という言葉に緊張もしていましたが、その心配は1日目になくなりました。

二子石さんの人柄に救われたからです。冗談をいい、おちゃめで、目がキラキラしている、まさに少年そのものでした。

「まだまだ叶えたい夢があるんだ」と二子石さんが語ってくれたときの、透き通った澄んだ瞳は今でも忘れられません。

研修の合間には、私にかみさまのお話もしてくださいました。

若いころ自衛隊のパイロットとして操縦席の中から壮大な自然を見たときに、天地を創造した神様を感じたそうです。私にもその情景が鮮明にわかるように、丁寧にお話をしてくださり、まだ洗礼を受けていなかった私は、二子石さんの信じている神様ってどんな方だろうと、神様に心が向くきっかけも与えてくださいました。

今回神学校週間で、「献身」というテーマで証をしてほしいとリクエストをいただいていますが、

私にとって、献身とは、まさにCFFのことであります。

「献身」という言葉の意味を調べてみると、次のように書いてありました。

身をささげること、自分の利益をかえりみず尽くすこと、自己犠牲。

立派なことが書いてありますが、私の献身とは自己犠牲とはかけ離れたものです。

YMCAからCFFに転職し、今年で４年目になります。

かつての私は自分の人生を自分の思い通りにしようとしていました。お金のこと、キャリアのこと、人生設計のこと、人生を自分のものとして所有し、自分の描いた思い通りになることが人生の成功と思っていた時期があります。

そんな私を救ってくれたのがマレーシアで出会った小さな子どもです。無国籍で、世界から弱く小さくされている子どもを通して私は本当の愛を受け取りました。それは真理との出会いとも呼べるものです。この子のために自分の命を使いたいと思いました。これは自分の人生が救われたような、人生のミッションを与えられたような感覚です。

私にとって献身とは、

自分の人生の舵取りを自分自身から神様に明け渡すこと。人生の主人公は私ではなく神様であること。

これが私の献身です。

しかし、献身の先に待っていたのは先程述べた自己犠牲などではありませんでした。

人生の舵取りを神様に明け渡した後に待っていたのは、心からの喜びです。働くとは、命の使い方であり、何のために命を使うかがわかると全てが喜びに変わりました。

ヨハネ8:32

私たちは真理を知り、真理は私たちを自由にする。

私にとって自由とは、自分の思い通りになる自由ではなく、明け渡す自由です。献身とは、自己犠牲ではなく、本当の自由です。

子どもたちと青年たちの育ち合いのなかで、本当の愛を伝えていくこと、分かち合うこと、これが私の献身の喜びであり、私の使命であります。

現在CFFの海外キャンプが全て中止となり１年以上続く中で、体制の縮小もありました。団体そのものの存続危機は依然として変わりありません。

一方で二子石さんを用いて神様が作ったCFFだから、きっと何があっても大丈夫と信じています。

私は御言葉の実現のために、子どもたち、青年たちへの伝道のために、この仙川キリスト教会から社会へ派遣されていると思っていますので、神様が私を通して、子どもたちや青年に語られる愛が強められるよう、また、このような社会においても必要とされるところへ大胆に愛を実践していけるよう、教会のみなさまにもより一層祈り支えていただきたいと願います。

最後になりますが、私にとってもビックお父さんの二子石さん、お父さんのように導いてくれた安部さん、そして天にいらっしゃる父なる神様に心からの感謝をしつつ、証を終わりたいと思います。